
夢の続き

早川 眞治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の続き

【Nコード】

N8521A

【作者名】

早川 眞治

【あらすじ】

夢の中の告白。起きたら聞こえてくる声。その声の主は、恋のキユーピッドらしいのだが……

プロローグ（前書き）

四作目です。テストが終わったら長編（連載）を書く約束があったので書き始めようと思います。

プロローグ

「好きです…」

日が沈みかけて空が紅く染まっている。

「私も晶くんのコト…」

「む？夢か…くぁっ！！もう少しだけ寝ていたかった…イヤもう一度寝る！！」

そう言って晶は、微睡みに

『寝ちゃダメ！！』耳元で聞こえる声。

「何奴！！」

晶は、体を起こし周りを見渡す。

「ちっ幻聴か…寝よ」

そう呟き寝る体勢に入った。

『寝ちゃダメです！！』また耳元で聞こえる。

「うるせー！！俺は、夢の続きをみるんだ！！」

『七原さんの夢ですか？』

「むっ！？なぜそれを！！」

晶は、バツと起きて問いかける。

『わかりますよー私が夢を見させたんですから』声は、笑いながら返事をする。

「む？わからん」

首をひねる。

『私は、晶さんと七原さんがつき合えるようにするために神様に派遣されたんですよ』

「む？本当か！？幻聴！！」

興奮気味に問いかけた。『むー私は、幻聴じゃなくて（サミ）って名前があります。』イジケ気味に言っている。

「すまんすまん。サミ…でさっきの話は本当か？」

本題に戻した。

『はい。晶さんと七原さんをつき合わせます!!』頼もしい。

「じゃあぜひ頼むよ」

『任せて下さい!!でも、晶さんも頑張って七原さんと遊んだりして下さいね?今の状態じゃ出来ませんから』

「わかった!!任せろ!!」

こうして晶とサミの作戦?が始まった。

プロローグ（後書き）

プロローグです。ああ・何か不安が（笑）今後も宜しくお願いします。早川 眞治でした。

挨拶作戦!!

「よっしゃー!! 燃えてきたぜ!! まってろよ絵美!!」

晶は、何故か叫ぶ。

『でも、七原さんと話したこともないですよね?』サミが冷静に言い放つ。

「くっ…そうだった!! どうすれば」

頭を抱えながら言っている。

『まずは、挨拶です』ビシッと指を立てながら（見えないから立っているような感じで）言っている。

「基本からだな。うむ…任せろ!! まずは、着替えて学校に行くぞ」
晶は、そう言って準備をしはじめた。

『いつから七原さんが好きなんですか?』

「知りたいか?」

晶は、なぜか笑いながら言っている。

『はい!!』サミも元氣よく答える。

「つか…神様の使いならわかるんじゃないのか?」

答える前に小さな疑問をぶつけた。

『そこまでは、こうやって一人の人につけば心までわかりますけどね』簡潔に説明する。

「そうか…じゃあ今は、口に出さなくても考えるだけでわかるんだな?」

晶は、そう言いながら理由を頭の中で描いた。『そうでしたかー』

「よう七原お早う!!…これでいいか? イヤー」

挨拶の練習をしている。挨拶を練習するというのもおかしい話だが。

『そんな感じで行きましょう』またも指を立てているような感じで言った。

「到着！！（絵美は一居た）」

『さあ晶さんいきましよう』

「おう」

誰にも聞こえないような声で返事をして、絵美に近づいていく。

「お早う！！七原」

緊張をしながらも自然な感じで挨拶をした。

「お早う小林くん」

びっくりした後笑顔で挨拶を返してくれた。

『作戦成功です！！コレから欠かさずに挨拶して下さいね』サミが言う。

「おう！！わかってるぜ」

こうして挨拶作戦は、成功だった…がまだまだ道は、長そうだ。

教室で昼食を

キンコンカーンコンー

「よし、終わったぜ」

生徒が待ちに待った昼休みに突入した。

『晶さん晶さん』サミが話しかけてくる。

（なんだ？）

『そんなに寝ていると、大変じゃないですか？』

（うるせえっ！！そんな事のために呼びかけるな！！）晶は、イタ
いところを突かれて怒り気味に言う。

『あとー』

（なんだ???)

『七原さんを昼食に誘って下さい。私は、一週間までしかいられませんから』

（なに！？そんな漫画みたいな設定って！！）晶は、驚きと戸惑いで慌ててしまった。

『まあまあコレは、小説ですしーいいじゃないですかー長くなるとイロイロ大変ですし』サミが笑いながら凄いコト言う。

（む???小説???大変???なんのコトだ???) 晶は、首を傾げている。

『だからー』（わかったわかった。もういいから、何にも聞いてな

いからな。」神にしか わからないコトとして流す。

『それより…早く昼食を』サミが思い出したように言った。
(おう!!)そして、晶は、絵美に近づいていき…

「七原と一緒に昼飯食わないか？」

緊張：返事を待つ時間が長く感じる

「うん いいよ」

絵美は、笑顔で、答えた。

「サンキュー」

晶は、そう言って、席に着く。

「私とご飯なんてどうしたの??」

普段話もしないので疑問に思っているようだ。

「ん?クラスメートだから仲良くしたいじゃん??」

本当の事など言えるはずもなくそう答えた。

「そっか…そうだね」

笑顔で返してきた。

そんな感じで昼食を楽しんだ。

(午後の授業は、寝るか)

『午後の授業も!!ですね』

晶は、サミの発言を無視して、眠りについた。

理由

サミの言葉をサラリと流して眠りに入る　フツ…スマートだな

（それは、雨の日だった。

とても　とても強い雨　傘をさしていても　服は、びしょびしょになっ
ていた。

『お家…ないの？』少女が雨の中しゃがんで何かに話しかけている。

『そっか…じゃあ、家に連れて行ってあげるからね』

そう云って少女は、犬を抱きかかえて家の方へと小走りで去った。

ちょっと前に見た光景。

七原　絵美を好きになった理由。

優しいから好きになったわけじゃない　犬に話しかけているときの
彼女の横顔　とても切なそうで、消えてしまいそうで…守ってあげ
たくなったんだ。

そう、あの消えてしまいそうな横顔を守りたいと思ったから…。）

ガンッ―

「うおっ!!」

晶が勢いよく顔を机にぶつけた。

「小林ー！！また寝てたのか！！」

教師の声が教室…いや、隣のクラスにまで聞こえている…：…はず…。
『晶さん！！起きて下さい！！』幻聴…じゃなくてサミが必死に起こそうとしてくる　が俺は、全て気にせず、また眠りについた。

（『お前にあの子が守れるのかい？』どこからか聞こえてくる声。

「もちろんだ！！」

俺は、自信満々に答える。

『どんな事があっても守れるのかい？』からかっているかの様な聞き方をしてくる。

「守る！！」

『イヤ…お前には、無理だ彼女の心の穴は、ふさげない』

「心の穴？何をわけのわからない事を！！」

俺は、少し熱くなりながら云う。

『無理だ』

「うるさい！！守る！！」

『無理だ無理だ無理だ無理だ無理だ無理だ…』

「うるさい…うるさい！！」

クラスメートがみんな俺を見ている。

「そのこ追い出して」

教師の呆れた声と顔　俺は、廊下に出された。

『おい：さっきの夢はなんだ？』夢を見させる事が出来ると云ったので聞いてみる。

『わからないんです：夢を見させようとすると拒否反応が出て、とりあえず神様の方にまわしておきますから安心してください』

『そうか：』

キンコンカーンコンー

廊下に出てからずっと夢について考えていたが　考えれば考えるほどわからなくなり　不安になる。

『晶さん平気です！！任せて下さい！！！！』

理由（後書き）

テスト間近で更新がなかなか出来ません（・ω・、；）

デート

七原 どんな格好でくるんだろ…。

俺は、その時を今か今かと待ちわびている。

「小林君ごめんね待った?？」

絵美のちよつと落ち込んだような顔

「いや、今来たところだ」

定番である言葉をかける。まあ、本当に今来たような気分だ

「そっかよかった♪」

ぱあっと笑顔になる やはり、笑顔の方がいいな

「じゃあ一行こうか」

俺は、そう行って駅に向かった。

(今日は、サミもないから楽だな)

『お留守番中でつまらないサミです…つまらないんで七原さんと晶さんがデートをするまでの経緯を話しちゃいますよー』

挨拶やお昼ご飯を仲良く食べて、登下校も一緒にするようになったお二人です…って事で次の課題は、デート!!それしかありません…と云うことでサミは、お留守番でデートに行きました。

え???時の流れがおかしい???登下校とかの話がない???そこまで話したらサミが疲れちゃいますよ(笑)

「遊園地なんて久しぶりだよー」

絵美は、嬉しそうな笑顔を見せる。

「俺も久しぶりだなー」

雑談をしながら向かうと早く着くもんだな。

「小林君 遊園地だよ!!」

子供の様にはしゃいでいる。

「フッ」

その姿をみて笑ってしまう。

「なにー??」

絵美は、頬をちょっと膨らませる。

「いや、何でもないよ。さあ何にする?」

「んーアレがいい!!」そう云って絵美が指さしたのは…『コーヒ
ーカップ』…（最初にコレか…まあ強く回さなければ）

「よし、行くか」

そう云うと絵美は、晶の手を掴みコーヒークップに向かった。

「ちょ…まあいいか…」

晶は、顔を赤くしながらも笑んで向かった。

コーヒークップの後もジェットコースターでバンザイしたりお化け

屋敷で怖くて抱きついてきたり…楽しんでた。

夕日がそろそろ帰る事を告げた。

「七原じゃあそろそろ帰るか」

晶が云う…すると「後少し…最後にアレに乗らない?」

絵美が指さしたのは、観覧車だった。

「ああ…」

そう云って、二人で観覧車に乗り込む。

「今日は、楽しかったよ有り難う」

絵美が笑顔で云う。

「ああ、また来ような」

晶の言葉に絵美の顔が曇る。

「ごめん…もう、来れないんだ…」

「えっ…?」

その後 絵美が口を開くことは、なかった。

デート（後書き）

こんにちは、早川 眞治です。更新が遅くてすいません。

楽しかった日々…そして現実

あの遊園地での絵美の言葉…。

『もう来れないんだ…』

なんで…なんでなんだ？ 考えていてもわかるはずもない。

「とにかく、絵美と話せば…」俺は、走った。「絵美…何処に…」
教室を覗いたが絵美の姿は、無かった。

「くっ…何処にいるんだ…」俺は、走り続けた。窓から入る光は既に赤くなっている。

「後は…」ギイイー―

「屋上だけだ…やっと見付けたよ…絵美」絵美がこちらを向く。

「小林…くん…?」

「絵美…やっぱりわからないよ…なんでだ？ なんで…もう…」

「あのね…? 私…病気なんだって…治らない…病気…なんだっ…うつ…うつ」フェンスに寄りかかっていた絵美がしゃがみこむ。

「えっ…? ナオラナイ…ビョウキ…?」そんな…そんなのありかよ！？ ただ一緒にいたいだけなのに…それも叶わないのかよ！？

「絵美…」肩に触れる。ドサッ―絵美が力なく倒れる。

「絵美…!？ どうしたんだ!？ 取り敢えず保健室に…」

保健室に入ると病院と同じ独特な臭いが鼻を通る。

「先生！ 絵美が倒れて!」

「七原が!？」俺の慌て様に事態の重さを察した先生がスグに病院へ連絡してくれて、救急車で運ばれる。

「それで…絵美は…?」先生に尋ねる。

「原因不明…我々にもわからないんだ…すまない…」そう云いながら先生は、頭を下げた。

「なんで…なんでだよ…なんで絵美が!」俺の頬を冷たいものが流れる。

「晶さん」何処からか聞こえる声 周りをみても人影は、なかった。
「晶さん：サミですよ」脳内で響く声の主は、あの日突然現れ突然居なくなったサミのものだった。

「サミ！突然いなくなつて…」まだ目から溢れ出している。

「ゴメンナサイ：七原さんの事が気になつて：神様に話をしていたんです」サミが申し訳なさそうに云う。

「それで：絵美は助かるのか！？」涙を手で拭い聞く。

「助かる方法は、あります：でも、晶さんも覚悟が必要です…」

「なんでも：助けられるなら！」俺は：絵美が好きだから：助けられるのは、俺しかいないんだから！

「わかりました。では、説明します…」

「わかった。それで、絵美が助かるんだな？」

「はい」

絵美を助ける方法：それは、絵美の夢に入り込み病の原因を除去する事：失敗すれば二人とも死ぬ…。

楽しかった日々…そして現実（後書き）

まず始めに…ごめんなさい（――）私こと早川眞治 忙しすぎて更新しておりませんでした…。

久しぶりに書く話は、登場キャラとか忘れちゃいますね（ゝωゝ；）
忘れないようにしっかり書きますか…早川眞治でした。

原因…そして

「晶さん目を閉じて下さい」サミの云う通り俺は、目を閉じた。

「では、行きます3，2，1…」そこで、サミの声は、聞こえなくなり光が無くなった。

「ここが…絵美の精神世界…？」あの笑顔の絵美を考えると酷く暗い。

少し歩くと人影が二つ。

近付くにつれて光を放ち始めた。

「絵美！！」二つの人影の一人は、絵美だった。もう一人は、闇に包まれているように見えない…が原因は、あの闇だ。

「小林晶…」闇に包まれている『なにか』が声をかけてくる。

「誰だ！！」少し距離を取り身構えながら返事をする。「ふふふ…ひ・み・つ♪」影は、鬱陶しく云った。うぜー。

「とりあえずお前は、いいや…絵美を帰せ！！」俺が云う。

「七原絵美…この子は、心に闇がある…暗い暗い…」絵美に闇だと…？あんなに明るい笑顔の似合う女の子が…。

「嘘だな！！」

「嘘じゃない…この世界は心に比例するのだ…この意味がわかるか？」心が明るさに比例する…？つまりこの世界は、暗い…が絵美は明るい…。わからない…。

「絵美は、明るいんだが…？」とりあえず疑問をぶつける。

「そっ…それは…」影が口ごもる。チャンス…か？

「なんで光っているんだ？生きたいって事じゃないのか！！絵美！！起きるんだ！！」

「よせ！！今この子を起こしたら…！！」俺は、気にせず叫んだ。

「ん…晶…く…ん…？」

「もう…ダメだな…小林晶…では、少ない時間を楽しむんだな」そう云って影は消えた。

「絵美！！」俺は、絵美の側に駆け寄った。

「晶くん…わたし…」

「帰ろう絵美」俺は、優しく云った。

「帰らない…だって…どうせ死んじゃうから…」絵美も暗くなってきた。心なしか周りも暗くなってきた気がする。

「でも…」確かに…絵美は、原因不明の病気だって…。

「晶くんは、帰って…？」泣きそうな声。

「そんな事できん！！」そう話してる間も絵美や周りが暗くなっていく。

「私は、帰れないの…」

そう云った瞬間 本当に真っ暗になり意識も途絶えた。

原因…そして（後書き）

一年ぶりくらいに更新します。すみません。

その後〜報告〜(前書き)

最終話です。

その後〜報告〜

『レポート』

彼等は、非常に残念な結果になってしまった。だが闇の住人の生態も彼等のおかげで、だいたい解ったのも事実だ。

『闇の住人』

我々は、彼等の事を少し勘違いしていた。彼等は、人を闇に陥れるのではなく闇に捕われた者に生きる気力を与える為 長い眠りにつかせるようだ。

『サミ』

小林晶の元へ派遣された天使サミは、あの事件以来姿を見せなくなった。彼女も残念だが闇と消えていつてしまったようだ。

『晶と絵美のいなくなった世界』

クラスメイトが二人もいなくなった教室は、悲しみにくれていたが、それをバネに固い絆で結ばれたクラスになり強い人間になった。

七原絵美の両親は、ひどく悲しみ食事もせずにいたらしいが、祖母が声をかけて、少しずつ明るさを取り戻しているらしい。

小林晶の両親：父は、ショックを受けたせいで、記憶喪失になり病院に入院している。母は、旦那を入院させた後に失踪 まだ発見されてない…。

『小林晶と七原絵美』

闇に飲まれてしまった後は、魂もドコへ行ったかわからない。しかし、二人で仲良くしているのであろう事を祈るばかりだ…。

その後ゝ報告ゝ（後書き）

ようやく完結しました。連載物は苦手なようなのです…これから連載物を載せるときは、完結させてから公開しなきゃいけませんね
W W W
それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8521a/>

夢の続き

2010年12月31日19時10分発行